

魏志倭人伝・魏使の行程

2022年3月15日

我部山 民樹

1. はじめに

関和則著「卑弥呼」（1997年版）の冒頭を借りると『邪馬台国研究は吉野ケ里遺跡の発見以来、考古学の成果に乗り展開されていると言っても過言ではない。佐賀県の吉野ケ里遺跡（よしのがりいせき、添付の参考資料①を参照）が発見されれば九州説が脚光を浴び、奈良県の唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき、添付の参考資料②参照）が見つければ畿内説と騒ぐ、そこには学問的基準が見られないのである。自身の見解に都合の良い面のみ強調する傾向に陥りがちである。』と。奈良県の纏向遺跡（まきむくいせき、添付の参考資料③を参照）の発見後も同様だったと思われる。



末盧国→伊都国は東北だが、南東と書かれている。伊都国→不弥国も同様である。

‘邪馬台国は畿内ありき’で、そのために南に北九州の不弥国から「南水行20日で投馬国、南水行10日、陸行一月」の行き先は南ではなく東方向の間違いとしてしまうとか、‘九州ありき’で、はるか沖縄やジャワ島に達するので、一月を一日の間違いと読み替えてしまう。このような流れで、自身に都合の良いようにさらに曲解するようになって、邪馬台国論争が泥沼化してしまったのだろう。

関係文献を読み始めて見たが、確かに結果ありきで、それに合わせて、魏志倭人伝の記述の読み替えをすとか、自説に都合が悪ければ間違いだと決めつけて無視してしまうとかにより、まさかと思われる珍説まであるようだ。この混乱は決定打が無いことをいいことに、私のような素人までが好き勝手に自説を唱えて、かき回していることに起因するのかもしれない。

しかし、同じ著書に「史料は生きているのであり、分析する側の視点、分析が革新的に変わるならば泉のごとく新たな知見を提供してくれるのである。」とも書いている。

古代史研究家は邪馬台国を研究しても決めてが無いため泥沼にはまってしまい、確たる結論を出せないで、邪馬台国研究から一線を引いているようだ。

素人は泥沼まで辿り着けないだろうし、特段の成果を目途にしていないので、魏志倭人伝の読み替えとか無視するとかをしないことを前提に、自分なりの視点で魏志倭人伝だけをベースに魏使が邪馬台国へ辿った行程を読み解きたいと思う。

邪馬台国の位置論に先立ち、当時の大陸の人々の日本列島の位置の認識や形状の認識を論じるべきだろう。魏志倭人伝の中から、大陸から見た場合の日本列島の位置や形状（「3世紀の大陸から見た日本列島」を参照）を読み取り、それに基づき

魏志倭人伝を解釈することが重要である。十五世紀の地図や現在の地図と矛盾があるからと云って、それを全て間違いとしてしまうのは避けるべきである。

我々は「倭国が会稽の東に位置するというのは誤認」と分かるが、当時の大陸の人々はそれを信じていたのだから、それを前提にしないと魏志倭人伝は読み解けない。その上、240年に渡来した初めての魏使・建中校尉梯儻(ていしゅん)らは明らかに伊都国や奴国の方角・東北東を南東と誤認している。太陽や月の軌道で方角を判断しているので、倭国内の方角の誤認は一貫しているはずである。全ての方角を修正した上で合理的に魏志倭人伝を読み解くことが必要である。

2. 三世紀の地図と当時の地理認識を確認する

○三世紀の中国と朝鮮半島（現在の地図をベースに）



三世紀の中国は有名な赤壁の戦いの後の魏・呉・蜀の三国時代（229～263年）である。朝鮮半島は百済・新羅が国家としての体裁を整える以前の原三国時代（～4世紀中頃）である。馬韓・弁韓・辰韓の三国が存在した。北部は魏の帯方郡や楽浪郡で、南方は倭の狗奴韓国があった。（添付の参考資料④参照）帯方郡や楽浪郡の北方には高句麗が存在した。後に朝鮮半島は百済・新羅・高句麗の三国時代（四世紀中頃～七世紀）に入る。紀元前二世紀の馬王堆漢墓からは1メートル四方の「長沙国南部図」が発掘されているので、三世紀には地図があったはずであるが、現存していない。新羅が魏に地図を提出したとの記録もある。

○三世紀の大陸と倭国（現在の地図をベースに）



当然魏が認識していた日本列島の認識は現在の地図や十五世紀の地図とも異なるが、時間差の少ない十五世紀の認識に近かったのかもしれない。

3. 検証の前提条件

会稽の東に倭国があったと魏が認識していて、南北に広がっていたと誤認していたので、それをベースに読み解くべきである。我々が分っている地図をベースに検討しても無意味である。博多が鹿児島辺りに位置していることになる（「3世紀の大陸から見た日本列島」を参照）。そうすると狗奴韓国（くやかんこく、釜山）～伊都国（博多）間が500km程度となる。実際の直線距離は230kmであり、約2倍の距離である。現代の我々から見ると誤認は明らかだが、その誤認

に基づいて、魏使（最初の帯方郡使・梯儻（ていしゅん）、二度目の帯方郡使・張政（ちょうせい））は倭国内の行程を報告した。魏使も誤認していたのだろう。誤認していたが、それを信じていたのだ。魏志倭人伝を書いた陳寿は魏使の報告書、その他の報告書や伝承に基づいて魏志倭人伝を作成したのだ。

文献によると、魏志倭人伝の原史料は以下に分類される。

- ①魏志倭人伝の作者・陳寿（ちんじゅ）の解説，補足
- ②最初の帯方郡使、梯儻（ていしゅん）の報告に基づくと思われる文
- ③二度目の帯方郡使・張政（ちょうせい）の報告に基づくと思われる文
- ④裴松之（はいしょうし、372年～451年、中国の東晋末・南朝宋初の政治家・歴史家。字は世期）が加えた注記
- ⑤魏の公文書の写し（そのままと思われる）
- ⑥魏中央政府の何らかの史料から得た文の要約

末盧国から伊都国（いとこく）、伊都国から奴国（なこく）の方角は明らかに誤認していて、北北東を南東と誤認している。方角は正確に測定したものではなく、ほんの目安であろうが、60～70度の誤認だ。当時は太陽が昇る方向を東と考えており、魏の使節が来航し易い夏に来たとすれば、実際の東は時計と反対方向廻りに45度ずれることになる。また、魏の洛陽と伊都国との緯度によっても差異があるので、それらが影響したこと等が原因と憶測されるが、ほぼ90度の誤認の原因を特定することは出来ない。特定できなくても伊都国と奴国の方角を誤認だと認めながら、倭国に上陸後のこれ以外の方角は正しいと解釈するのは不合理である。いずれの地でも同じように太陽の軌道で判断しているのだから、明らかな誤認だけでなく、全ての方角を修正すべきである。ただし、大陸から見た朝鮮半島や周辺の島々、それに倭国の方角は誤認していないようだ。倭国に上陸後に誤認したようだ。

倭国の国名、倭国や地名は全て中国側が名づけたもので、彼らが交易等で既に知っているところである。（我々がアメリカを米国と呼び、中国では美国と呼ぶのと同じだ。音韻や意味を探ってもアメリカ人は自国が何故そのように呼ばれるののかは理解出来ないだろうし、この場合も同じように思われる。）

（とうまこく、つまこく）は過去に交易等で往来した国なので既に認知していて、名前を付けていた。（‘つま’から‘いずも’は連想される？）それで報告書に書くことができたのだろうが、国と呼ぶほどでもない小規模の集落は名前を付けていなかったのを書いていないのであろう。

水行は昼間の移動だったので、夜間は沿岸の港等に立寄って、移動中は毎日上陸して宿泊していたはずだが、彼らが名前を付けていないところは記録することができなかったのだ。水行中に立ち寄ったところで、事前に名前を付けていた

のは唯一投馬国だけだったのだ。古代の海の民は我々が想像するよりはるかに逞しくて、大陸と倭国は相互に日本海の島々を伝って交易していたのだろう。現に、朝鮮半島に倭の狗邪韓国があったのだ。

○投馬国

- ・内陸ではなく、沿岸地域である。
- ・過去に大陸と交易していたので、名前をつけていた。交易を考慮すれば大陸や朝鮮半島に比較的に近い場所である。北九州沿岸か日本海沿岸である。
- ・50,000余戸（人口は150,000人から200,000人くらいか）の大集落である。
- ・不弥国（ふやこく）から水行20日位で到達できるし、20日位はかかる位置となる。
- ・行程の途中で北九州の国々は名前を付けている。それ以外に魏の人々が唯一名前をつけていた国が投馬国である。他に立ち寄った場所は国の規模ではなく小集落であり、名前を付けていなかった。

これらより、憶測すると日本海沿岸で最大の集落の出雲国が候補だ。出雲国までの水行日数20日が想定内であれば、十分候補になり得る。後で検証する。上陸地は当時、まだ小集落だったかまたは魏が交易をしていなかったのだろう。

三浦祐之氏が著書に『日本海沿岸は、四世紀末頃には但馬国に新羅国の王子を名乗る人物が住み着いたと言う話を紹介し、日本海側は、渡来系人々が訪れ、交易を行い、そこに住み着いた人々も多かった。そうした諸外国の使節を受け入れる迎賓館や船の整備港などもあった。』と紹介している。

この交流は徐々に拡張されていったので、少なくとも三世紀頃から日本海沿岸は大陸と交易していたのだろう。この交易があったからこそ出雲国が繁栄していたのであろう。日向国（ひむかのくに、宮崎）が候補とした場合、水行10日陸行一月もかかるだろうか？後で検証する。

4. 魏使の辿ったルートの検証

(1) 魏志倭人伝による倭国に関する記述の抜粋

『・倭人(わじん)は帯方(たいほう)の東南大海の中に在り、山島に依(よ)りて国邑(こくゆう)を為(な)す。旧(もと)百余国。漢の時に朝見(ちょうけん)する者有り。今、使訳(しやく)通ずる所三十国。

郡より倭に至るには、海岸に循(したが)って水行し、韓(かん)国を歴(へ)て、乍(あるい)は南し乍(あるい)は東し、其の北岸狗邪韓(くやかん)国に到(いた)る七千余里。始めて一海を度(わた)る千余里、対馬(つしま)国に至る。其の大官を卑狗(ひこ)と曰(い)ひ、副(ふ)を卑奴母離(ひなもり)と曰(い)ふ。居る所絶島、方四百

余里可(ばかり)り。土地は山険(けわ)しく、深林多く、道路は禽鹿(きんろく)の徑(みち)の如(ごと)し。千余戸有り。良田無く、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴(してき)す。又(また)南一海を渡る千余里、名づけて瀚海(かんかい)と曰ふ。一大〔一支(いき)〕国に至る。官を亦(また)卑狗と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。方三百里可り。竹木・叢林(そうりん)多く、三千許(ばかり)りの家有り。差々(やや)田地有り、田を耕せども猶(なお)食するに足らず、亦南北に市糴す。

又一海を渡る千余里、末盧国(まつろこく)至る。四千余戸有り。山海に浜(そ)ひて居る。草木茂盛(もせい)し、行くに前人(ぜんじん)を見ず。好んで魚鮓(ぎょふく)を捕へ、水深浅と無く、皆沈没して之(これ)を取る。東南陸行五百里にして、伊都国(いとこく)に到る。官を爾支(にき)と曰ひ、副を泄謨觚(せもこ)・柄渠觚(へくこ)と曰ふ。千余戸有り。世々(よよ)王有るも、**皆女王国に統属す**。郡使(ぐんし)の往来常に駐(とど)まる所なり。東南奴(な)国に至る百里。官を兕馬觚(しまこ)と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。二万余戸有り。東行不弥(ふみ)国に至る百里。官を多模(たも)と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。千余家有り。

南、投馬国に至る水行二十日。官を弥弥(みみ)と曰ひ、副を弥弥那利(みみなり)と曰ふ。五万余戸可り。南、**邪馬壹(やまい)[台(たい)]国に至る、女王の都する所**、水行十日陸行一月。官に伊支馬(いきま)有り、次を弥馬升(みましょう)と曰ひ、次を弥馬獲支(みまかくき)と曰ひ、次を奴佳鞮(なかてい)と曰ふ。七万余戸可り。**女王国より以北**、其の戸数道里は略載す可(べ)きも、其の余の旁国(ぼうこく)は遠絶にして得て詳(つまびら)かにす可からず。

次に斯馬(しま)国有り、次に巳百支(しおき)国有り、次に伊邪(いや)国有り、次に都支(とき)国有り、次に弥奴(みな)国有り、次に好古都(こうごと)国有り、次に不呼(ふこ)国有り、次に姐奴(そな)国有り、次に対蘇(つそ)国有り、次に蘇奴(そな)国有り、次に呼邑(こお)国有り、次に華奴蘇奴(かなそな)国有り、次に鬼(き)国有り、次に為吾(いご)国有り、次に鬼奴(きな)国有り、次に邪馬(やま)国有り、次に躬臣(くし)国有り、次に巴利(はり)国有り、次に支惟(きい)国有り、次に烏奴(うな)国有り、次に奴(な)国有り。此(こ)れ女王の境界の尽くる所なり。

其の南に狗奴(くな)国有り、男子を王と為す。其の官に狗古智卑狗(くこちひこ)有り。**女王に属せず。郡より女王国に至る**萬二千余里。

・ **女王国より以北**には、特に一大率(いちだいそつ)を置き、諸国を檢察せしむ。諸国之を畏懼(いたん)す。常に伊都国に治(ち)す。国中に於(お)いて刺史(しし)の如き有り。王、使を遣して京都(けいと)・帶方郡・諸韓国に詣(いた)

り、及び郡の倭国に使用するや、皆津(つ)に臨(のぞ)みて搜露(そうろ)し、文書・賜遺(しい)の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯(ささく)するを得ず。

下戸、大人と道路に相逢(あいあ)へば、逡巡(しゅんじゅん)して草に入り、辞を伝へ事を説くには、或は蹲(うずくま)り或は跪(ひざまず)き、両手は地に扠(よ)り、之が恭敬(きょうけい)を為す。対応の声を噫(ああ)と曰ふ、比するに然諾(ぜんだく)の如し。

其の国、本亦男子を以て王と為し、住(とど)まること七・八十年。倭国乱れ、相攻伐(あいこうばつ)すること歴年、乃(すなわ)ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼(ひみこ)と曰ふ。鬼道(きどう)に事(つか)へ、能(よ)く衆を惑はす。年已(すで)に長大なるも、夫婿(ふせい)無く、男弟有り、佐(たす)けて国を治む。王と為りしより以来、見る有る者の少なく、婢(ひ)千人を以て自ら侍(じ)せしむ。唯(ただ)、男子一人有り、飲食を給し、辞を伝へ居処に出入す。宮室・楼観・城柵、巖(おごそ)かに設け、常に人有り、兵を持して守衛す。

女王国の東、海を渡る千余里、復(ま)た国有り、皆倭種なり。又侏儒(しゅじゅ)国有り、其の南に在り、人の長(たけ)三・四尺、女王を去る四千余里。又裸(ら)国・黒齒(こくし)国有り、復た其の東南に在り。船行一年にして至る可し。倭の地を参問(さんもん)するに、海中洲島(しゅうとう)の上に絶在し、或は絶へ或は連なり、周旋(しゅうせん)五千余里可りなり。

景初(けいしょ)二年六月、倭の女王、大夫難升米(なんしょうまい)等を遣して郡に詣(いた)り、天子に詣りて朝献せんことを求む。太守劉夏(りゅうか)、吏(り)を遣し、将(も)って送りて京都(けいと)に詣らしむ。

・その(邪馬台国までの)道の里程を計算すると、まさに(中国の)会稽から東治の東にあるはずだ。』とある。

(2) 女王国の特定

邪馬台国の記述は一箇所のみで「女王の都するところ」である。女王国は5か所に書かれていて、女王連合国と捉えるべきだが、都・邪馬台国と解釈しないと、辻褄が合わない箇所がある。

女王国は

- ・邪馬台国
- ・21か国の連合体
- ・30か国の連合体
- ・官職を書いている8か国(邪馬台国、対馬国、伊都国、奴国、不弥国、投馬国等)

のいずれかである。

の解釈がある。陳寿はあいまいな使い方をしているようだ。

女王国の解釈（現在の地図より）

	通説？	方角を修正
今は皆女王国に属している。	皆は名前の書かれている 21 か国の女王連合 国と解釈（30 か国、8 か国の解釈もある）	同左
女王国より北の国々	女王連合国としても邪 馬台国でもよい。九州 説の邪馬台国からの対 象国は ・北九州の国々 ・朝鮮半島の国々	西の国々となるの で、畿内説の邪馬台 国からは西方の、西 日本や北九州の国々 となる。
その南、狗奴国は女王国に属 せず。郡から女王国まで1万 2千余里である。	距離を特定するので、 一定の位置である。邪 馬台国と解すべきだろ う。 狗奴国は熊本地方の国	邪馬台国の東となる ので、近畿地方や岐 阜地方の国になる。
女王国より北に一大率を置き （伊都国内に）	女王連合国の北なら韓 国になってしまう。邪 馬台国の北方の伊都国 内と解すべきである。 邪馬台国の位置は九州 の南方地域となる。	畿内の邪馬台国から 西方の伊都国内と解 すべきである。
女王国から東へ海を渡る、千 余里、また国あり、皆倭種な り。その南に侏儒国がある。 身長1メートルほどの小さな 人たちがおり、4千余里離れ ている。倭種の国々の東南に は裸国、黒齒国がある。船行 一年にして至る。	*1	

○*1. 諸説あるが、「侏儒国」、「裸国」、「黒齒国」は、すべて架空の国とされているのが定説のようだ。いずれにしても魏使の報告ではなく、他の史料や伝承によるものだろうし、邪馬台国へのルート特定には無関係である。

・東方の海の小人国について

魏志倭人伝に先行する史料である『山海経』（紀元前五世紀より書き加えられてきた地理書）には東方の海に「小人国」という島があるとされる。他にも同書には「焦僂」「周饒」「菌人」などの小人たちが東方や南方に住んでいるとされる。「焦僂」「周饒」は「侏儒」と同系の発音で同語源、もともと同じ言葉である。倭国ではなく、東南アジア系の国の伝承だろうが、これが侏儒国の原史料だろうか？

・当時、船で一年も航行する技術もなかったし、出発地に情報が届くはずがない。架空の話であろう。

・「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり」はこの項目では最も近いのに国名がない。例えば、この国を四国や西日本とすれば、国名を明記しているはずだ。

この項目は邪馬台国に至るまでの紹介文に続いていないし、記述内容も異なり疑問がある。全く別の情報に基づいて書き込んだのだろう。この項目までは30か国ほどの国名を明記しているし、国名の分からない国もあるとしている。この項目でも遠方にある侏儒国は国名を明記し、さらに1年もかかるところの遙か遠方の裸国や黒齒国も国名を明記しているのだ。遠方の架空の国を紹介するために、途中で国名の分からない倭の国もあると辻褃合わせのために架空の国を創作したのだろうか？それとも、そのような伝承だろうか？何れにしても存在が非常に疑わしいこの国の場所を比定するほどの価値はなさそうだ。

九州説なら東に四国があり合致しているが、畿内説だと該当する国が無いので畿内説はあり得ないと主張している専門家がいるようだが、存在の疑わしい国を根拠にするのには疑問がある。

○「官」制を明記している8か国をまとめる

国名	長官	副官
対馬国	卑狗(ひこ)	卑奴母離(ひなもり)
一大国	卑狗	卑奴母離(ひなもり)
伊都国	爾支(にき)	泄謨觚(せもこ) 柄渠觚(へくこ)
奴国	兕馬觚(しまこ)	卑奴母離
不弥国	多模(たも)	卑奴母離
投馬国	弥弥(みみ)	弥弥那利(みみなり)

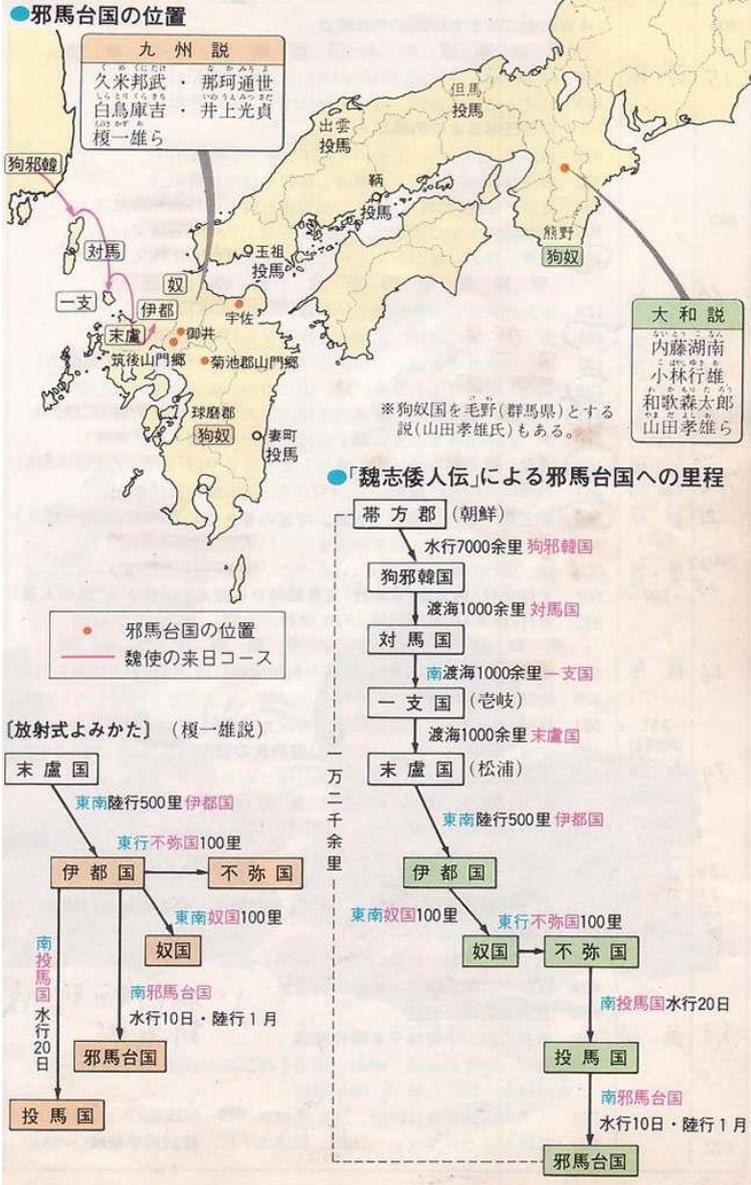
邪馬台国	官 伊支馬(いきま)	次官 弥馬升(みましょう) 弥馬獲支(みまかくき) 奴佳靱(なかにい)
狗奴国	狗古智卑狗(くこちひこ)	

邪馬台国の官職名だけが異なり、官と次の官である。他国は長官と副官である。その中でも伊都国は副官が2名であり、邪馬台国以外の他国より強大だったのであろう。

対馬国と一大国の長官は同じ卑狗であり副官も同じ卑奴母離なので、国の規模から対馬国が一大国より上位だったと読み取れる。

奴国、対馬国、一大国、不弥国の副官は同じ卑奴母離なので、奴国が支配していたとも読み取れる。

○九州説と畿内説を纏めた資料



ここで里数の換算比と水行の日数の日速度が問題だが、推測する比で移動量を換算した結果を図に表すと次のようになってしまう。



倭国を会稽郡の東とした場合



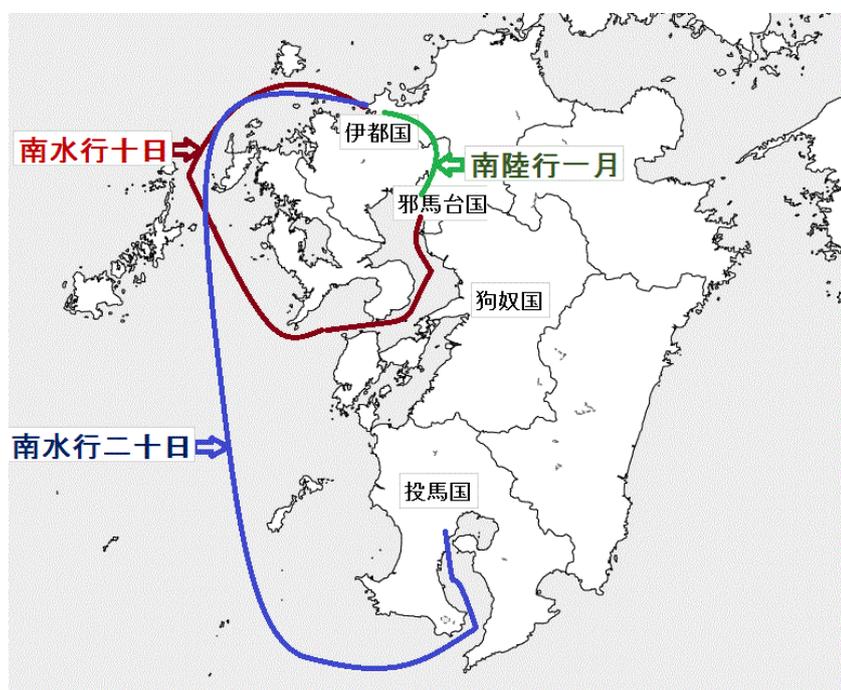
(3) 九州説

「放射式よみ方」だと、

- ① 魏使の辿ったルートは末盧国→伊都国→邪馬台国となる。奴国や不弥国は通過していない。
- ② 魏使が通過していない奴国や不弥国への距離も里数になっている。倭国では日数でカウントしていたので、里数や方角を決めたのは魏の帯方郡の郡使とその部下ということになる。
- ③ 邪馬台国へは魏使が初めて訪れるので、日数でカウントした。郡使らは訪れたことが無かったのだろう。
- ④ 投馬国へは魏使は訪れなかった。郡使らが訪れたことがあるが、遠いところなので日数とした。
- ⑤ 末盧国から伊都国間だけが、その時に見た風景を書いている。それは夏季を思わせ、季節を特定している。これは魏使自らの見聞である。誰かに聞いた話ではない。奴国と不弥国の情報は郡使らから魏使が聞いたか、陳寿が郡司使らの報告を見て書いたことになる。しかし、郡使らはもっと多くの近隣諸国と交流があったはずなので、ここで近隣諸国を紹介するなら、奴国、不弥

国、投馬国だけというのは合点がいかない。水行 20 日の遠方の投馬国との交流もあつたくらいだ。常識的に見て、魏使が通過した国を書いたと解釈するのが、合理的だろう。

- ⑥ 魏使が通過していない奴国、不弥国、投馬国は女王国なので、郡使らが過去に訪れていて、里数、日数、方角を定めて、魏や魏使に報告したことになる。それを紹介するなら、通過した国としない国とは文章の構成を区別したはずである。しかし、使訳（通訳）の通ずる三十か国のうちで女王国がなかったかどうかは分からない。
- ⑦ 水行 10 日陸行一月を OR で解釈するのは自説の為の曲解ではなかろうか？ どのように読んでも AND である。AND 以外には考えられない。



『放射式よみ方』には疑問があり、納得し難いことが多々ある。それに魏志倭人伝は中国の人が中国人に向けに書かれたものである。果たして中国人がこのような読み方をするのだろうか？ 中国の専門家がそのような読み方はしないとテレビで視聴した記憶がある。記憶が正しければ日本人が九州説ありきで、そのための曲解ではないかとの疑問が残る。素直に読みとれる範囲で検討すべきである。

文献によれば

『七世紀の「イ妥（倭）国」の姿を記した『隋書』「イ妥国伝」には、

「イ妥国は、百済・新羅の東南、水陸三千里に在り、大海の中の山島に依りて居す。魏の時、中国と訳を通じること、三十余国、皆自ら王と称す。夷人は

里数を知らず、但だ日を以て計るのみ」、「日数で距離を測る」とある。つまり七世紀の一般の倭人は「里数」は知らず「日数」で距離を表していたということだ。これは三世紀倭人呼の時代の倭人も「日数」で距離を表していたことを意味する。それは当然「直線距離」ではなく「行程距離(道のり・航路)」となろう。』とある。

(4) 畿内説



魏使らや郡使らは明らかに倭国内に入ってから、方角を誤認している。末盧国から見て伊都国は東北東に位置するが、それを南東としている。さらに伊都国から奴国も東北東なのに南東としている。

太陽の動きを見て方角を判断しているのだから、その後も同じ誤認をしていたはずだ。約90度、方角を誤認した理由は推測できても特定はできない。原因が明らかにならなくても誤認は修正すべきである。

奴国から不弥国を東方向としているが、それほど遠くない港に向かっているのだから北のはずである。素直に解釈すれば記述した国を順番に魏使が訪れ、それを報告したと解釈できる。

不弥国からも南ではなく、東方向に水行したと修正しなければならない。

「南、投馬国水行20日」⇒「東、投馬国水行20日」と修正すべきである。

その場合、日本海側と瀬戸内海側の二通りの説があるが、瀬戸内海は潮流が複雑で海の難所だった。(添付の参考資料⑥を参照)

その上「三世紀の大陸から見た日本列島」に書いたように軍事上の理由で瀬戸内海は避けるはずなので、日本海側ルートである。その沿岸地域が大陸と交易していたことも伺える。それに瀬戸内海ルートの場合、大阪湾から上陸した後の陸行は一月もかからない。後で検証する。

5. 古代の移動手段と移動速度

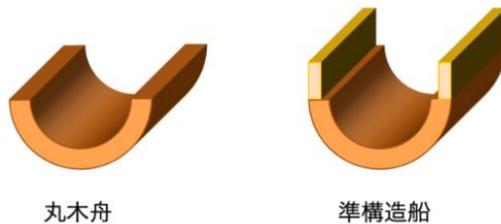
三国志の前の漢の時代の一里（長里）は435mだったといわれている。一方で、魏晋代には短里も併用して使われたといわれ、これは75m～80mくらいといわれている。しかし、いずれにしても辻褄が合わないし、感覚的な里数と解釈できるので、換算には拘らないことにする。

(1) 弥生（～三世紀中頃）時代の船

○船の構造と移動速度

丸木舟や準構造船は、パドルやオールを使って推進し、水流を無視すれば3～5 km/h r で進むことができた。

これは徒歩と同じ速度である。



徒歩での1日の移動力は約10km～30kmであるため、これに準じて考えることができる。しかし、湖でもない限り、水流の無い場所はほとんどない。海流・潮流や、川の流れに応じる必要がある。

（添付の参考資料⑦参照）

準構造船も丸木舟と同様、パドルやオールを使って推進し、約3～5 km/h r で進むことができる。

大型の準構造船であれば人員を割いて推進できるため、もっと速度が出せた可能性が高い。例えば、「ガレー船」のような運用をするようになったのは、古墳時代以降（三世紀中頃～）の準構造船である。古代日本において帆船が利用されていたことを証明するものは見当たらない。一般的には、古墳時代を過ぎて「飛鳥時代（七世紀）」に入って以降、中国のジャンク船を遣隋使で使用するようになった形跡がある。

以下は遣唐使船の模型だが、このような構造の船は七世紀以降のことである。



○三世紀の船での移動状況

・文献によれば『丸木舟や準構造船は、パドルやオールを使って推進し、水流を無視すれば3~5km/h r で進むことができた。

これは徒歩と同じ速度である。

徒歩での1日の移動力は約10km~30kmであるため、これに準じて考えることができる。

しかし、湖でもない限り、水流の無い場所はほとんどない。

海流・潮流や、川の流れに応じる必要がある。

対馬海峡であれば、最も距離のある釜山（韓国）から対馬までが、約60kmである。

また、縄文時代より交易のあったことが分かっている隠岐の島（隠岐諸島）から本州までは、最も短い距離で約45km。

つまり、潮流を読んで進めば、30km以上の距離を進むことができたのである。

逆に言えば、時速3km以上の潮流に逆らって移動することはできない上に、天候により少しでも波が高い場合は丸木舟を利用できない。

そもそも丸木舟は放っておいたら浸水状態にあるため、常に水を掬い出しながら航行する船である。それでも古代日本では船での移動が好まれたようである。それは、古代日本には地域間を跨ぐためのまともな道路が整備されていなかったからである。船は危険な乗り物であったが、登山道や獣道のような場所を移動するよりも効率的だと考えられた。川も「下り」は流れに乗れば楽であるため、「上り」は人力で曳くとか、担いで移動していた。

弥生時代まで、丸木舟のような非常に不安定な船で、古代日本人は朝鮮半島や中国との交易をしていたことになる。パドルを使って推進する丸木舟で対馬海峡を渡るためには、潮流を読む必要がある。「潮待ち」をして絶好の時期・時間を見定め、対馬・壱岐島を渡っていたものと考えられる。

なお、丸木舟であれば大破することがないため、潮を見誤って目標から外れても漂流できる。運が良い漂流者は対馬海流に乗って、沖ノ島（対馬の東沖）、見島（山口県沖）、隠岐の島、北陸地方（能登）といった場所に流れ着くことも多かったようである。そのなかでも、対馬の東沖にあって女人禁制の神聖な場所として祀られている「沖ノ島」は、対馬海峡を渡ろうとした漂流者が、なんとか生きながらえられた島として特別視されていたことであろう。

現在、沖ノ島は「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群として世界遺産に登録されている。

対馬海峡ほどではないが、意外と航行が難しい海が瀬戸内海である。当時の船の移動速度は日あたり10~30km。しかも、天候や積載量が大きく影響する乗り

物である。

そのような乗り物を現実的に運用するためには、当時の瀬戸内海の沿岸部には、10km ごとに船舶集団が停泊できる村落や船宿街があったことを意味している。九州と畿内を結ぶ交易路であった瀬戸内海沿岸部は、「船宿（航海者の休息場所）」が発達しており、古代日本における政治経済の大動脈として機能したと考えられる。

瀬戸内海は諸島が多い多島海であり、それだけに潮流が複雑で急で、「一に来島、二に鳴門、三と下って馬関瀬戸」と謳われるほどの海の難所である。』とある。

・また、『平安時代の紀貫之の「土佐日記」によると、土佐・大津～難波・淀川尻までの 285km を 実質 12 日（土佐日記には、潮待ちで何日も船宿で待機したとの記述もあるため、純粋な移動速度ではない。悪天候で港に避難するとか、立ち寄り先での饗応受けもあり、実際は 50 日を要している。饗応の日数が多かったのだろう。）の航海で渡った。この航海の日速度は 24km となる。人力航走であった。快晴で風波の無い日が最上の航海日和であった。』とある。

表 1 水行の日速度

名称	野生号一世	紀貫之「土佐日記」	茂在看解	日本海縄文カヌープロジェクト	からむしⅡ世号
船種	古代船 全長16.5m	帆船	古代船	アウトリガー付カヌー 全長5.5m	丸木舟 全長8.2m、幅0.64m
年月日	1975年	934年12月27日～		2013年5月25日	1982年7月24日
出発地	帯方郡	土佐大津		糸魚川市能生町	隠岐知夫里島郡港
経由地	魏志倭人伝ルート			海岸沿い	渡海
到着地	末盧国	難波淀川尻		上越市郷津	島根半島七類港
方向	南	北東		北東	南南東
距離	1200km	285km		沿道25km (26.6km)	56km
時間	47日	12日(航海日数)		7時間50分	12時間43分
日速度	26km/日	24km/日	20～23km/日	26km/日	56km/日
時速	3.2km/h	—	—	3.3km/h(4.8km/h)	4.4km/h
秒速	0.9m/s	—	—	0.9m/s(1.3m/s)	1.2m/s
備考	韓国沿岸は曳航 乗員14人	総日数39日、帆走1日	帆走は追風時のみ、省力のため	海のスィロード 漕ぎ手2～3人 ()書は休憩時間除く	弥生前期以前想定 漕ぎ手5人(小学校PTA)
出典	茂在寅男『古代日本の航海術』 ²⁾			上越タイムス ³⁾	『縄文の丸木舟、日本海を渡る』 ⁴⁾

(注) 1ノット=1.85km/h

(2) 水行移動速度

条件は

・航海術と航路

陸岸を見ながらの地乗り航法で、朝鮮半島沿岸にべったりの航海であった。雨や霧で視界がきかなくなるのを恐れたので、航海は好転の日に限られた。

自然、日和待ちの停泊が多くなった。

- ・玄界灘の横断

・手漕ぎの古代船・「野生号」を復元し、仁川から博多で実験したデータあるが、途中で曳航したとのことで参考にならない。玄界灘の横断は厳しく、季節と天候を慎重に選ばなければならなかったのだろう。古代も帆船を使用したのかもしれない。

であり、これらより実質の日速度は24kmとする。

古代推定復元船「野正号」

(角川春樹氏)



(3) 陸行移動状況

三世紀には日本列島に馬はいなかった。

大陸から日本に「馬」が輸入されたのは、4～5世紀頃とされている。

また、長距離の移動手段として使用されるのは、七世紀以降に「駅路(七道駅路)」が整備されてからである。魏志倭人伝には「馬も牛もない」(農業や移動に利用していないということだろう)と書いている。馬に乗ることも牛車も使用できなかった。陸行は歩くしかなかった。

(4) 歩行速度

○三世紀の道路事情

2～4世紀頃の日本において、「道」とは獣道のようなものだった。

- ・文献によれば

『日本列島は平坦な場所が少なく、険しい山河に阻まれていて「徒歩」での移動が困難な土地である。

その土地柄から道路が敷設される時期は非常に遅く、日本で計画的に道路を施設するようになったのは6世紀(飛鳥時代)からだといわれていることが多い。

しかし、それも都市化した集落間の移動のためのものであり、国と国とを結ぶ長距離移動用の道路はなかった。言い換えれば、それまで(4世紀頃まで)は人通りが多いところに自然と形成される踏み分け道であり、「道を作る」という概念すらなかった可能性も指摘されている(齋藤 2018)。』

- ・別の文献によれば

『四世紀までの日本は、現代で言うところの「登山道」のようなものであったはずだ。むしろ、現代の登山道の方がよほど整備されているとも考えられる。

このため、1日の移動力は約10kmほどだったと考えられる。』

「丸木舟や準構造船は、パドルやオールを使って推進し、水流を無視すれば3～5km/hで進むことができた。これは徒歩と同じ速度である。徒歩での1日の移動力は約10km～30kmであるため、これに準じて考えることができる。』

・また、別の文献によれば

『魏志「魏志六、裴松之注所引「英雄記」」に、「昼夜三百里来る」とある。また、同じ三国志の「蜀志七、裴松之注所引「張勃吳録」」に、「「鶩牛（どぎゅう、*人のあだな）一日三百里を行く」とあり、三国志の時代の標準的な陸行速度は、「1日あたり三百里」だったと考えられる。現代でも、一般的に、人の歩く速度は、ゆっくり歩けば時速4kmほどだ。300里を、 $300 \text{ 里} \times 75 \text{ m/里} = 22.5 \text{ km}$ として計算すると、一日あたり進む時間は、 $300 \text{ 里} \div 4 \text{ km/時} = 22.5 \text{ km} \div 4 \text{ km/時} = \text{約} 5.6 \text{ 時間}$ だから、一日約6時間となる。当時は、道も整備されていないなか、多くの荷物を積んだ荷車を、人力でゆっくりと押して行くわけだから、妥当な数字だろう。

結論として、「1日あたり三百里、20～25km程度進んだ」』とある。』とある。

6. 魏使の移動量を想定する

(1)水行移動距離

・投馬国までの水行の場合

一日あたり、24km程度（あくまで目安）となり、

単純移動距離は $24 \times 20 \text{ 日} = 480 \text{ km}$ である。

悪天候で避難することや立ち寄り先での饗応受けを考慮すれば、実質の稼働（根拠は無いが）は約60%と想定すると、実際の投馬国までは約290kmとなる。

・上陸地まではさらに同じ方向に10日水行している。上陸地までは約440kmの範囲となる。大集落地が候補なので、規模と移動距離から推測すると投馬国は出雲国、さらに水行10日の上陸地は但馬国と想定できる。

(2)陸行の移動距離

現代でもゆっくり歩いて時速4km程度である。末盧国から伊都国までの道は「草木茂盛し、行く人前人を見ず」と書かれていたように、この時代の道路は整備されていなくて標高差もある上に、荷物を背負って歩いたのだろうし、その上荷車を押していたかもしれない。文献より、時速3～4km程度と想定し、7時間移動したとして一日あたり $(3 \sim 4) \times 7 = 21 \sim 28 \text{ km}$ となる。

一月では $(21 \sim 28) \times 30 \text{ 日} = 630 \sim 840 \text{ km}$ となる。

悪天候や饗応を考えて、50%、更に直線距離の比率を50%とすると直線距離にすると移動した直線距離は160～210kmの範囲となる。

例えば、上陸地を但馬国とすると畿内間との直線距離はおよそ 150 km なので、悪天候、潮待ちや饗応による避難日数はその時々で変わってしまうあやふやさがある。それを考慮すると上陸地として但馬国は候補となる。因みに、大阪～畿内の直線距離はせいぜい 50 km である。

- ・投馬国は水行距離と集落の規模からして出雲国が最有力候補と言えるだろう。
- ・上陸地の記述は無いが、水行距離と集落の規模、古道がある程度整っていた可能性も高いので、有力候補となる。
- ・上陸地から畿内までの直線距離はおおよそ 150 km で、陸行一月の推定移動距離の範囲となる。

これらの検討結果を地図に纏めると次のようになる。



7. 魏使の辿った工程以外で魏使が絡んだと思われる魏志倭人伝について

①その南に狗奴国有り⇒現在の地図上はその東に狗奴国有りと修正すると岐阜や伊勢地方の国となる。女王国がいわゆる東遷してきたとすれば、敵対する国との境界に都・邪馬台国を置いたと想定できる。

②‘女王国（都・邪馬台国ではなく、連合国）の以北に一大率を置き’⇒‘現在の地図上では女王国の以西に一大率を置き’に読み替えとなる。伊都国内に一大率が置かれたと書かれているので、伊都国が女王国（ここでは馬台国だろう）の西方にあるので、合致する。

8. さいごに

魏志倭人伝の方角は間違いではなく、誤認である。誤認の原因は憶測できるが、証明は出来ない。原因を証明できなくても、誤認は修正した上で、検証すべきである。

伊都国や奴国の方角が誤認していると認めているのに邪馬台国の南方向は合致しているとする根拠は無いはずだ。合理的に倭国内の方角を同様に修正しなければならない。

考古学的には、邪馬台国の候補となる遺跡は多々あるようだが、それは大王が住む都の候補であろう。複数存在したかもしれず、強大になるにつれ移動して行ったのであろう。魏使が訪れた邪馬台国は一箇所である。想定移動距離に合致する畿内には「面積が 3,000,000m²（吉野ヶ里遺跡の 3 倍近くの広さ）の纏向遺跡」があり、祭祀にも用いたとみられる 2,800 個に及ぶモモの種が出土して、その放射性炭素年代を測定したところ、西暦 135～230 年と判明している。それは女王・卑弥呼の年代と重なっている。重視すべきである。

魏志倭人伝に書かれている「卑弥呼が魏より貰った銅鏡 100 枚、親魏倭王の金印、卑弥呼の墓、鉄鏃、都の風景」等や発掘物の検証が残されているが、モモの種は有力な手掛かりであろう。（添付の参考資料⑧を参照）

有力候補の一つである吉野ヶ里遺跡は弥生時代の大規模環濠集落跡。3 世紀頃に最盛期を迎え、117 ヘクタール（1,170,000m² の「クニ」全体で 5,400 人が住んでいたとされる。居所、宮室、楼観、周囲を囲む厳重な城壁との記述が合致している。

魏志倭人伝の記述にある 70,000 余戸（推定人口 210,000～280,000 人）に比して規模が小さい。魏使は倭国の国力調査をかねていただろうから、人口はほぼ正しく把握していただろう。

添付参考資料

① 吉野ヶ里遺跡

佐賀県神埼郡吉野ヶ里町にまたがる吉野ヶ里丘陵にある遺跡。国の特別史跡に指定されている。



② 唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）

奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵にある弥生時代（紀元前十世紀または紀元前五世紀、紀元前四世紀頃から、紀元後三世紀中頃まで）の環濠集落の遺跡。国の史跡に指定され、出土品は国の重要文化財に指定されている。



③ 纏向遺跡（まきむくいせき）

奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯にある、弥生時代末期（一～三世紀）から古墳時代前期（三世紀後半～四世紀後半）にかけての集落遺跡。国の史跡に指定されている。



④ 邪韓国

文献によると『三世紀中頃に朝鮮半島南部にあった国。中国正史の『三国志』や『後漢書』に見え、『三国志』では「其(=倭国)の北岸の狗邪韓国」とある。『後漢書』では「倭(現在の日本)の西北端の国」とする。伽耶、任那(みまな)との関連性が指摘されている。』

『原三国時代の朝鮮半島南部 邪馬台国があった頃(三世紀)、朝鮮半島南部は馬韓・弁韓・辰韓の3つの地域に50余りの国々が分立する、原三国(三韓)時代を迎えていました。この原三国時代の遺跡からは、邪馬台国と同じ頃の遺構や、日本列島との交流を示す遺物なども見つかっています。韓国の西南部、全羅北道咸平郡では、馬韓の土器 窯跡が発掘されました。ここで焼成されたような馬韓の土器は、北部九州を中心に西日本でも見つかっています。同じく韓国西南部、光州広域市の新昌洞遺跡も、馬韓の遺跡です。この遺跡からは水田遺構が検出され、木製品や稲俵が出土しましたが、稲俵の品種は全てジャポニカ(日本型)のものでした。また征山に近い金海市付近は、『魏志』にも登場する弁韓12国の一つ、狗邪韓国の地と考えられています。この金海市にある良洞里遺跡は、弁韓・狗邪国時代の墓地なども見つかった遺跡で、その一つ162号木棺墓からは、北部九州・奴国の製品と思われる鏡も出土しています。(九州歴史史料展示解説)』

⑤ 魏使の辿ったルート of 推定地

	距離	推定地	実際の直線距離
帯方郡→女王国 (都・邪馬台国? 瓶中では区別している)	1万2,000余里	ソウル?	
帯方郡→狗邪韓国	7,000余里	釜山	1,200 km
狗邪韓国→対馬	1,000余里	釜山→対馬土居崎 →船越浦	109 km
対馬→一支国	1,000余里	船越浦→壱岐勝本	60 km
一支国→末盧国	1,000余里	壱岐勝本→博多	60 km
末盧国→伊都国	500余里	唐津市→糸島市	36.5 km
伊都国→奴国	100余里	糸島市→那珂遺跡群(福岡市博多区) か?	約25 km

奴国→不弥国	100 余里	那珂遺跡群(福岡市博多区)?→不弥国の港か	10 k m未満?
不弥国→投馬国	水行 20 日	博多の港?→畿内?	およそ 300 k m
投馬国→但馬国?	水行 10 日		およそ 150 k m
但馬国?→邪馬台国	陸行 1 カ月		およそ 150 k m

⑥ 瀬戸内海の潮流



⑦ 日本近海の潮流



⑧ 魏と邪馬台国との関係

- 卑弥呼の中国王朝への使者派遣の目的
- 文献によると

『卑弥呼は何故中国王朝に使者を派遣したのだろうか？

当時倭国では覇権をめぐる邪馬壹国と狗奴国など周辺国との緊張が続いており、卑弥呼が大国の後ろ盾と権威を切望したためであろう。220年 後漢が滅びると魏呉蜀の三国時代に入ったが、238年魏が公孫子を倒し、帯方郡を支配して異民族との協調に努めた。魏が帯方郡を併合すると即座に卑弥呼は魏へ使者を送ったことになる。さらにもう一つの理由は、朝鮮半島に産出する鉄の確保である。当時のハイテク技術である鉄や銅による武器類を製造する者が争乱の倭国を統一出来ると考えられた。三国志魏志の韓伝には『朝鮮半島南部には鉄を産出し、韓、倭の人々が、この鉄を求めてしきりにやって来る。』と記されており、親魏倭王となった卑弥呼は魏公認でこの鉄を入手出来ることになるのである。

○魏の卑弥呼への詔

『魏志の倭人伝によると、景初二年（西暦二三八年）の12月皇帝から倭の女王に詔が下される。『親魏倭王卑弥呼に詔を下す。帯方郡の太守の劉夏が、使いをよこして汝の大夫難升米と、副使の都市牛利（としごり）を送ってきて、男四人女六人の奴隷と、斑文様の布二匹二丈献上するため、都へ到着させた。汝のいるところは遙か遠いにも関わらず、わざわざ使節を派遣して貢ぎ物を持ってこさせた。私は汝に好意をもった。そこで、汝を親魏倭王となし、金印紫綬を与える。包装してから帯方太守に託し、授けるとしよう。汝は、国民を教えさとし中国の皇帝に忠誠をちかうよう、努めるがよい。そこで、紺地の模様のついた綿を三匹、斑模様の毛織物五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀を二口、銅鏡を百枚、真珠と鉛丹それぞれ五十斤を与えるとしよう。みな包装して、難升米、牛利に託しておく。』とある。

○親魏倭王の金印

文献によると『魏志の倭人伝によると、景初二年（西暦二三八年）の12月皇帝から倭の女王に詔が下される。『親魏倭王卑弥呼に詔を下す。帯方郡の太守の劉夏が、使いをよこして汝の大夫難升米と、副使の都市牛利（としごり）を送ってきて、男四人女六人の奴隷と、斑文様の布二匹二丈献上するため、都へ到着させた。汝のいるところは遙か遠いにも関わらず、わざわざ使節を派遣して貢ぎ物を持ってこさせた。私は汝に好意をもった。そこで、汝を親魏倭王となし、金印紫綬を与える。包装してから帯方太守に託し、授けるとしよう。汝は、国民を教えさとし中国の皇帝に忠誠をちかうよう、努めるがよい。そこで、紺地の模様のついた綿を三匹、斑模様の毛織物五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀を二口、銅鏡を百枚、真珠と鉛丹それぞれ五十斤を与えるとしよう。みな包装して、難升米、牛利に託しておく。』とある。

○魏が卑弥呼に与えた銅鏡 100 枚

文献によると『三角縁神獸鏡が候補といわれているが、この鏡には多くの謎が存在する。

卑弥呼の使者が持ち帰った銅鏡は 100 枚と言われているが、日本各地から出土する三角縁神獸鏡の数は 400 枚にも達すると言う。また、これらの銅鏡は同時期に製作されたものではなく、何度かに渡って製造されていたと言う。更に後期になるにつれて、造りが簡略化されている。特に鏡に刻まれている魏の年号も、中には実際にはない年号が書かれている物も存在する。

三角縁神獸鏡は中国からの出土例が少なく、一部では輸出専用で製造されていたのではないかとされている。

この三角縁神獸鏡が卑弥呼の時代である三世紀の古墳からは出土されず、四世紀以降の古墳から出土している。(藤原真)』とある。

参考文献

- ・ 関和彦著；「卑弥呼」
- ・ 茂在虎男；「古代日本の航海術」
- ・ 九州歴史史料展示解説
- ・ 三浦祐之氏
- ・ 齋藤氏 (2018)
- ・ 藤原真氏
- ・ ウィキペディア

追. 三世紀当時の発音から場所を推定したというツイッターさんの報告を紹介。



以上